那須烏山市 文化財マップ

―歴史・文化遺産と美しい景観に出会う―

102 木造 源翁和尚椅像

泉渓寺にある像で、像高は78cm。檜材による寄木造。胎内墨書から弘化2年(1845)宇都宮で造仏活動をしていた高田運刻の作とわかります。源翁和尚は那須の殺生石の話で有名ですが、本県内で確実に関わりがあると認められるのは本寺だけです。

132 興野ささら獅子舞

江戸時代の天保年間(1830～1844)、武茂領片根地区(現那珂川町)に継承されていたものが、武茂久治という人がその技を伝え、奉納するようになったと伝承されています。3頭の獅子が太鼓に合わせ「花かご」、「庭見」などを舞います。10月第3日曜日に興野地区と大沢地区の鎮守の日枝神社で奉納されます。

133 熊田太々神楽

明治初期に伊勢神宮で学んだ神官により伝えられたのが始まりです。神楽は岩戸神話に基づく31番の舞があります。10月中旬に熊野神社の例大祭(現在は、熊田西自治会公民館)に奉納されます。

134 森田の獅子舞

江戸期に小塙館を拠点として森田郷を支配していた大田原氏は災害が続き民心が動揺していたため、弁財天を祀り民生の安定と五穀豊穣を祈願したのが始まりとされています。8月下旬に弁財天の祭礼に夜間、奉納されます。

宮原八幡宮 135 観世流太々神楽

明治17年(1884)宮原八幡宮の神官が伊勢神宮で学んだ舞を伝えたのが始まりです。神楽舞は36座あり、かつては3日3晩踊ったとされています。現在は、9月中旬に行われる宮原地区の敬老会で演じられています。

136 下境佐々良獅子舞

稲積神社神官の口伝記録によると、宝暦元年(1751)当地に移住した個人の所有でしたが、明治初期に下境に委譲されました。稲積神社二百十日祭の前日(現在は8月最終の日曜日)、下境地区の4つの組の輪番制で奉納されています。

137 御救小屋跡

天保7年(1836)の飢饉時に烏山藩が導入した報徳仕法の際、飢えた農民を収容してお粥の炊出しが行われた場所の一部です。天性寺本堂、庫裡のほか、参道脇の空地に12棟の小屋を仮設し、12月1日から翌年の5月5日までの約150日間、延べ112,539人を救済しました。

140 那須家六代の墓

天性寺墓地上段に墓所があります。延宝3年(1675)、烏山城主板倉重種が場内拡張のため、旧地福泉坊から現在地に移転されました。下那須氏のものと推定されますが、墓石名は風化により判読できません。

143 曲田横穴墓群

岩穴横穴墓群とも言い、荒川支流の逆川左岸の丘陵斜面の下部に位置し、凝灰岩層を掘削しています。現在6基の横穴墓が並んで南向きに開口しており、更に東側に未開口の横穴が存在する可能性があります。古くから開口し、なかには室町時代の十三仏が彫り込まれたものもあります。

144 大和久古墳群

荒川左岸に位置する寺田、原の前、林先の支群に築造された古墳を総称します。寺田、原の前に所在した古墳は開発等で消失し、現存するのは林先の前方後円墳2基、円墳3基です。6世紀後半から7世紀前半にかけて築造されたと考えられ、本市最大の古墳群です。

147 耕便門の碑

烏山藩主大久保忠成の治世から殖産の一環として新田開発のための隧道工事が進められ、文政9年(1826)6月完成。約40haの水田が開かれました。碑は隧道出口に建ち、碑文と書は藩主のものです。

152 大田原氏累代の墓碑

慶長5年(1600)、大田原城主綱清の次子増清が関ヶ原戦の功績により森田村などを与えられ小塙館を築き、以後同所を累代の居館としました。芳朝寺は森田字石原の地に建立され、大田原氏領となってからは同氏の菩提所となり、元禄16年(1703)大田原清勝の時に現在地に移転しました。増清を始め、累代の墓碑があります。

168 西山辰街道の大桜

ヤマザクラで推定樹齢約350年。樹高は13.5m。源義家が奥州征伐の際にこの道を通り、人馬を休息した際にサクラの鞭を挿したものが根付いたという言い伝えがあります。4月上旬には見事な花を咲かせます。

ACCESS

新幹線・電車

JR／東北本線(快速1時間30分▶宇都宮▶宝積寺から烏山線35分)
東北新幹線(40分▶宇都宮▶宝積寺から烏山線35分)

自動車

東北自動車道(矢板I.C▶さくら▶那須烏山50分)
東北自動車道(宇都宮I.C▶さくら▶那須烏山50分)
北関東自動車道(上三川I.C▶高根沢▶那須烏山50分)
常盤自動車道(那珂I.C▶常陸大宮▶那須烏山50分)

―文化財見学にあたってのお願い―

文化財を所有又は管理をしている方は個人の方もおられます。
個人の方の見学にあたっては、事前に文化振興課にお問合わせ下さい。

編集・発行 那須烏山市教育委員会 文化振興課
栃木県那須烏山市大金240 ☎0287-88-6224
2016年(平成28年)1月発行

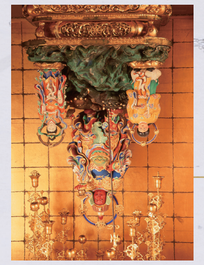
63 木造 薬師如来坐像

芳朝寺にある仏像で、像高は53cm。桂材による寄木造。螺髪は小さく、肩まで肩を衣文線の彫り出しがあります。平安時代の作として貴重であることから県6番指定を受けています。薬師寺は別名「いしがみ」と言われ、鎌倉時代に建立されたものと言われています。

64 木造 阿弥陀如来立像 (伝御前立)

芳原寺にある仏像で、像高は77.8cm。桧材による一木造。頭頂は正方形に近い陽髪を結い、眉は細長です。室町時代の作と考えられます。

55 木造 毘沙門天立像・両脇侍像



一乗院にある仏像で、毘沙門天立像の像高は52cm。三尊とも桧材による寄木造。安政2年(1855)烏山城主大久保忠美が城下鬼栄を願い、日光まで勧請したのと伝えられています。平成2年、厨子等が復元されました。

47 木造 延命地蔵菩薩坐像

正覚寺にある本尊で、像高は42.2cm。桧材による寄木造。興野観中寺が長禄元年(1457)当寺に勧請したものと伝えられています。頭体部は輪組く作りした体形です。

20 菩提大保の木々たち

八ヶ代地区の阿弥陀雅地墓堂の境内にあり、ほぼ東西に並べて植えられた3本の樹幹が基部で合着しています。樹高は約23m、樹勢は旺盛で、6月には枝一面にモモがつけます。

21 神長門(島山城裏門)

烏山城主堀親昌が寛永17年(1640)、三の丸を築いた際の烏山城裏門がこの門です。高さは4m53cm、正面幅は7m20cm、明治18年、現在地に移築されました。

23 太平寺仁王門

烏山城主堀親昌が寛文年(1661)、亡父親良の菩提を弔うため東江寺を建立した時の建築で、寛文12年、信州飯田～配封の際に太平寺に寄進移築されました。市内に唯一残る楼門で、仁王像を安置しています。

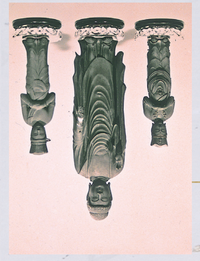
56 木造 阿弥陀如来立像

善念寺にある仏像で、像高は68cm。桧材による寄木造。頭、体部ともに亀裂をハッシャクとる(引きしまった期の型)ものと見ることができます。型のつまった和の頭、丸顔の周辺部広がりとともに、鎌倉時代(後期)の金銅仏に見る特徴を持っています。

66 銅造 阿弥陀如来立像

宝積寺にある仏像で、像高は48.5cm。前後の合掌型による一鋳仕上げの銅造で、両手は別鋳造のものを胴に差し込んでいます。型のつまった和の頭、丸顔の周辺部広がりとともに、鎌倉時代(後期)の金銅仏に見る特徴を持っています。

14 銅像 阿弥陀三尊立像

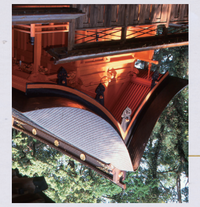


西方寺の本尊で、中央の阿弥陀如来の像高は44.5cm、長野県善光寺の本尊を模したものと伝える善光寺式阿弥陀三尊像です。鎌倉時代に多く造られ、県内では約20体近く残っています。

13 木造 薬師如来坐像

西光寺にある仏像で、像高は42cm。檜材による寄木造。彫眼の像は、天風の影響を受けた鎌倉時代の作です。像立時のお詳やお告等を安置した際に作る重要な仏像です。

5 寄原八幡宮本殿



明応2年(1493)烏山藩主那須資実が城域鎮護を行う際、現在地に移転造営したと伝えられています。本殿は三間社流造、本瓦葺で、那須資胤が寄進した内陣中央厨子は現存します。平成5～8年に保存修理が行われました。

6 木造 千手観音菩薩立像

太平寺の本尊で、像高は2m28cm。頭頂の仏飾から見元で一木の檜材から彫り出した伝える善光寺如来のように、浄土陸奥三尊像です。鎌倉時代に多く造られ、県内では約20体近く残っています。

3 程村紙

鎌倉時代の建保年間(1213～1219)に那須泰清が創製されたのが始まりと言われています。和紙の原料は那須楮、程村の名前は陸奥国の地名です。かつては、国政選挙の投票用紙としても用いられていました。現在は、「山びけ手漉」の山々を貼る紙を主に用いられています。

4 鳥の天祭

江戸時代の享保年間(1716～1736)、出羽国の鳥海上人が高野山で修行をし、鷲峯に帰依し金堂中、当地で開れ松原寺を開山し、天変行事を伝えたのが始まりと言われています。二階建ての天狗を建て、神輿、出羽三山詣でを行い人神仏に祈りをする神仏習合の姿をかたどっています。また、天鷲鵰で仕鷲狩や踊を使用した念仏踊り舞られます。現在は二百十日(9月1日)に近い日曜日に行われています。

1 烏山の山びけ行事

永禄3年(1560)旧烏山城内で疫病が流行し、烏山城主那須資胤がこの災厄を避けるため、大師村の牛頭天王を町の十文字に勧請したのが始まりと言われています。その後、余興が大綱曳となり、作り山の御で往言所作が行われました。現在は毎年7月の第4土曜日を含む3日間、「山」は数回、各町内でおけられます。

2 長者ヶ平官衙遺跡附東山道跡

源義家の伝説が語り継がれている遺跡です。発掘調査で南北約220m、東西約350mとしての範囲に掘立住居物跡、竪石建物跡をが多数確認され、政庁域、正倉域などが区分された遺跡。平安時代の役所(官衙)であることもわかりました。また、遺跡の北側には東山道約9mの東山道の道路跡も確認され、古代の交通の要衝に遺跡があることがわかりました。